



国指定史跡 小郡官衙遺跡群

小郡官衙遺跡

小郡市文化財調査報告書第300集



発掘調査以前の小郡官衙遺跡（昭和40年代前半）

2016

小郡市教育委員会



卷頭図版 1

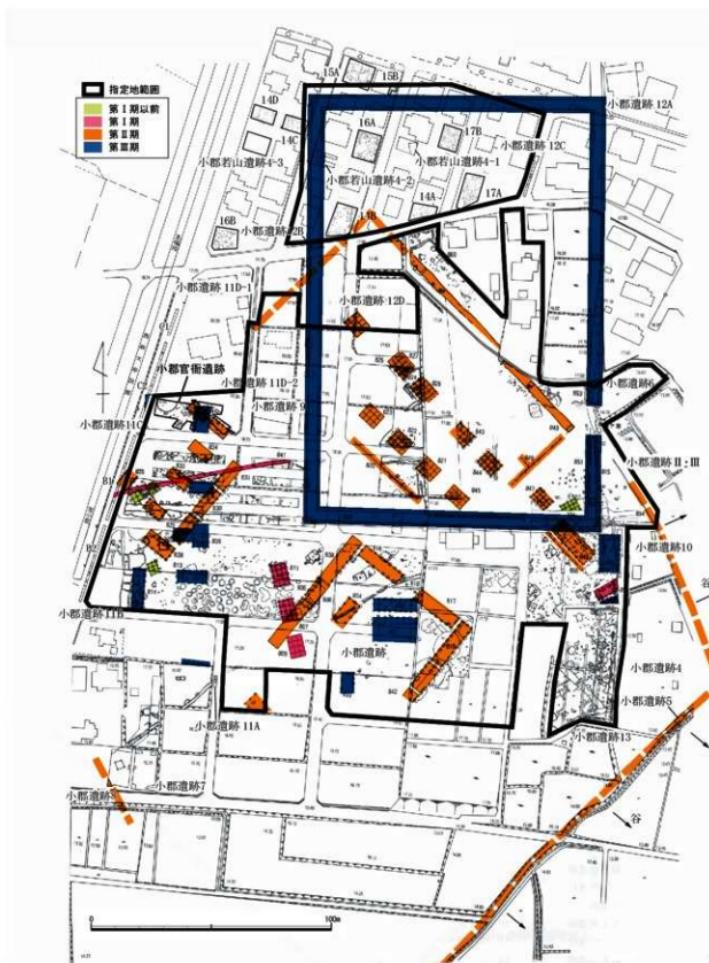


小郡官衙遺跡全景（上空から）



新たに発見された大型建物群（人が立っているのが第Ⅲ期建物 奥は史跡整備された公園）

卷頭図版 2



小郡官衙跡変遷図 (S = 1 / 1500)



<序 文>

今回報告いたします「国指定史跡 小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡」は、小郡市中央に位置し、小郡市を代表する史跡です。小郡官衙遺跡公園の便益施設整備に伴い、確認調査を行いました。調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして、現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 28 年 3 月 31 日

小郡市教育委員会 教育長 清武 輝

<例 言>

1. 本書は、平成 26 年度に行った小郡市小郡に所在する国指定史跡 小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡の史跡整備（便益施設整備）に伴う確認調査報告書である。調査は小郡市教育委員会文化財課が実施した。
2. 調査期間は、平成 26 年 6 月 9 日から平成 26 年 8 月 15 日まで実施した。調査面積は、238m²である。
3. 遺構の実測は担当者のほか、上田恵・龍孝明・白木千里・弥永志保、遺物の実測は久住愛子、デジタルレーラスは宮崎美穂子が行った。遺物の撮影は（有）システム・レコに委託した。
4. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第 II 系（世界測地系）に換算する。
5. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
6. 本書の執筆・編集は山崎頼人が行った。

<目 次>

第 1 章	調査の経過と組織	1
第 2 章	位置と環境	2
第 3 章	調査の成果	5
第 4 章	調査成果のまとめ	10
付 編	自然科学的分析結果	12

第 1 図 小郡官衙遺跡の範囲

第 2 図 小郡官衙遺跡周辺遺跡分布 (s = 1/2000)

第 3 国 小郡官衙遺跡周辺遺跡分布 (s = 1/25000)

第 4 国 SB01 (第Ⅱ期)・SB03 (第Ⅲ期)

第 5 国 小郡官衙遺跡遺構配置図 (s = 1/100)

柱穴土層断面図 (s = 1/40)

第 6 国 小郡官衙遺跡 SB03 (第Ⅲ期) 出出土器 (s = 1/2)

第 7 国 小郡官衙遺跡 弥生時代遺構出土土器 (s = 1/2)

第 1 表 小郡官衙遺跡出土土器観察表

図版 1 自然科学的分析結果 1

図版 2 自然科学的分析結果 2

図版 3 小郡官衙遺跡全景 (北西から) 弥生 SC01 検出状況 (南から)

図版 5 第Ⅲ期建物

図版 4 第Ⅱ期建物

図版 6 小郡官衙遺跡出土遺物



第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経過

小郡官衙遺跡は、昭和42～45年度に福岡県教育委員会によって発掘調査が行われ、7～8世紀代の掘立柱建物、溝、柵列などの遺構が整然とした配置で検出された。調査成果から筑後國御原郡衙に比定され、昭和46年12月23日付で「国史跡 小郡官衙遺跡」の指定を受けた。昭和47～50年度に公有化を実施し、昭和50～54年度にかけて史跡公園としての整備を行った。

昭和62・63年度に隣接地で宅地開発の計画があがり、発掘調査を行った結果、最初に指定を受けた箇所の周辺にも官衙遺構が分布することが明らかとなった。これを契機に遺跡北方の確認調査を進め、これまで追加指定を計8回行い、遺跡の保存を図ってきた。

小都市教育委員会は、小郡官衙遺跡の保存と活用を図るために、平成21年度に「小郡官衙遺跡 整備・活用方針」を策定し、平成22・23年度で「小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡 上岩田遺跡 保存管理計画書」の策定を行い、具体的な史跡の保護計画、現状変更方針を検討した。

平成24年度には整備基本構想・基本計画を策定した。整備実施への準備期間として、平成26年度より史跡関連のシンポジウム、史跡の活用・ソフト事業を進めている。また、既存の公園は、設備の老朽化がみられるものの、市民懇意の場として定着しており、再整備にあたっては既存の公園と一体化した史跡公園として整備・活用をはかる予定である。

既存の史跡公園には便益施設（トイレ）がなく、学習の場、憩いの場として大変不便であった。市民からの便益施設設置要望も高く、本格的な史跡整備に先立ち、整備基本計画で検討したゾーニングに基づいて、平成25・26年度に、地域活性化事業費を財源に、便益施設を先行して設置することになった。確認調査は、平成26年度に、工事に先立ち実施した。

2. 調査の経過

6月4日 表土剥ぎ1日目 遺構面は浅いところでは20cm程度で検出。搅乱およびコンクリートガラが多い。その後、人力による搅乱除去を西側から進める。

6月25日 正方位建物の確認のため、東側に調査範囲を拡張する。

7月1日 小郡市文化財保護審議会記念物部会開催。田中正日子先生、西谷正先生調査指導。

7月4日 小田富士雄先生調査指導。 7月5日 午後史跡案内ボランティアへ調査成果の説明。

7月8日 調査範囲、さらに拡張。 7月9・10日 台風8号九州接近のため、作業中止。

7月15日 II・III期建物部分再精査。 7月16日 柱穴部分直掘り。

7月17日 記者レク。 7月18日 午前 現地説明会開催 115名の参加。

7月29日 島根大学大橋泰夫先生来跡。 7月30日 空撮準備。

7月31日 空撮。法政大学板倉歓之氏、福岡県下原幸裕氏、坂元雄紀氏、杉原敏之氏来跡。

8月2日 午前小田富士雄先生来跡。万2町説の要再検討。午後、台風12号接近。5日まで大雨。

8月6日 平面図作成(8日まで) 8月8日 台風11号接近。

8月11日 真砂土による埋戻し開始。II期建物の柱穴確認のため一部拡張。

8月15日 埋戻し完了。

3. 調査組織

[平成26年度調査 27年度整理作業]

小郡市教育委員会

教育長 清武輝

教育部長 佐藤秀行

文化財課 課長 片岡宏二 係長 柏原孝俊 技師 山崎頼人



第2章 位置と環境

1. これまでの調査

本遺跡は小郡市を南北に貫流する宝満川の西岸、中位段丘上に立地する。これまでの調査では遺跡名が錯綜しており、保存管理計画で国指定史跡小郡官衙遺跡の保護が必要な部分について検討し、「小郡官衙遺跡」の包蔵地を更新した。

・小郡遺跡（土地造成）昭和42・43・45年度

奈良時代の掘立柱建物40棟が発掘され、計画性・規模から筑後國御原郡衙に比定された。建物群は、第Ⅰ期以前(7c前半～中頃)、第Ⅰ期(7c中頃～後半)、第Ⅱ期(7c末～8c前半)、第Ⅲ期(8c中頃～後半)と変遷する。第Ⅰ期は、柱建物3棟とその北を区画する直線的な溝のみが検出された。

第Ⅱ期は、コ字型配置の「郡庁」建物群を中心に、北には「正倉」とされる総柱建物群、西には「館」と推測される側柱建物群が配置される。第Ⅲ期は、SB801・SB802を主要建物とし、北側では区画溝(SD815)が検出された。

・小郡遺跡2（範囲確認調査）昭和62年度

第Ⅱ期正倉群の延長にSB843・SB844が確認され、出土土器から7c末～8c初の時期が指摘された。

・小郡遺跡3（内容確認）昭和62・63年度

第Ⅱ期では、官衙北東の区画溝(SD849)を検出、方二町の区画を推定。第Ⅲ期では、築地塀の内溝(SD851)を検出、東西1町(120m)の区画が判明。出土遺物や遺構の先後関係から、各時期が検証された。

・小郡若山遺跡4（重要遺跡確認調査）平成7年度

第Ⅲ期の北方区画(SD815・851)を検出し、区画の南北長が150mを超えることが確認された。

・小郡遺跡6（重要遺跡確認調査）平成10年度

「長者ヶ泉」の東側公園内における確認調査である。谷部で、遺構・遺物は確認されなかった。

・小郡遺跡9（駐車場造成）平成11年度

第Ⅲ期長方形区画(SD815・851)を検出。8c中頃～後半の須恵器高台付壊身と土器壊身が出土(SD851)。

・小郡遺跡12（下水道事業）平成14年度

A地点では、第Ⅲ期の区画溝(SD851・815)を検出した。これにより、長方形区画の規模が東西1町、南北1町半と確定した。D地点では、第Ⅱ期の正倉がさらに北西側に存在することが確認された。

・小郡遺跡13（共同住宅建設）平成17年度

当初から官衙施設が存在しなかった可能性が高く、第Ⅱ期建物群と関係する作業空間の機能が予想される。

・小郡遺跡14（重要遺跡確認調査）平成19年度

第Ⅲ期長方形区画内および周辺の内容確認調査である。14B地点では、第Ⅱ期区画溝(SD849)・第Ⅲ期区画溝(SD851)の一部が確認された。第Ⅱ期区画溝の北隅付近が明らかになり、方二町規模が裏付けられた。区画溝は本調査でも、人為的な埋め戻しが確認された。

・小郡遺跡15（重要遺跡確認調査）平成21年度

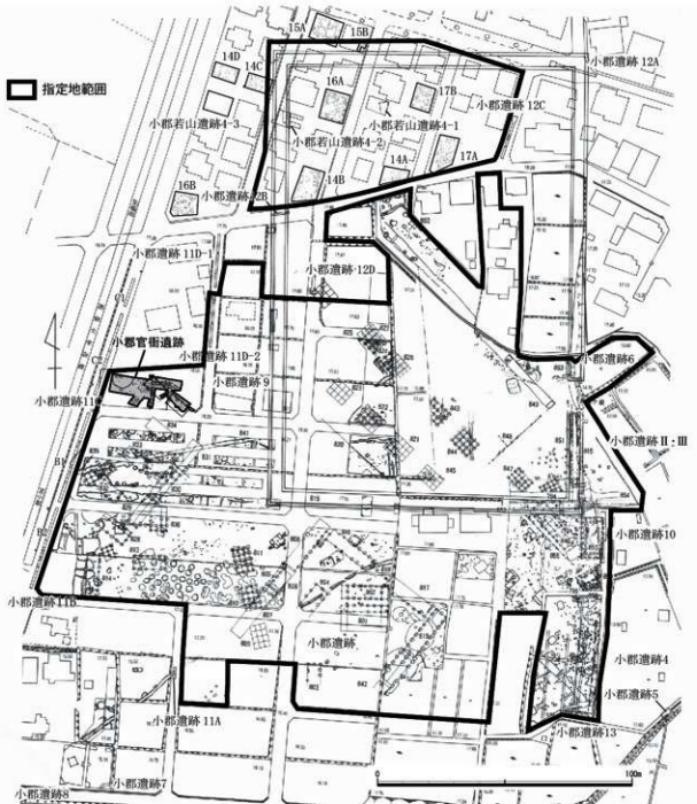
第Ⅲ期長方形区画内および周辺の内容確認調査である。15B地点では、第Ⅲ期の外側区画溝(SD815)の北辺の一部が確認され、区画規模が東西1町×南北1町半となることが追認された。

・小郡遺跡16・17（重要遺跡確認調査）平成21・22年度

第Ⅲ期の長方形区画内および周辺の内容確認調査である。第Ⅲ期長方形区画内部では、同時期の遺構は確認されず、既往の調査も含めて長方形区画内には同時期の主要遺構が存在せず、空間地の評価も想定された。



第1図 小郡官衙遺跡の範囲



調査次数	調査区域	期間	面積	調査原因	主な検出品種	報告書
第1次	小郡道路1	1987.8-12-10~31	4700m ²	土地造成	I 期発掘、Ⅱ期東方官衙群、Ⅲ期東方官衙群、長方形区画	『小郡遺跡』
第2次	小郡道路1	1988-4-25~5-24	1500m ²	土地造成	Ⅱ期東方官衙群、Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡』
第3次	小郡道路1	1988-7-10~8-12	2800m ²	土地造成	Ⅰ期発掘、Ⅱ期西方官衙群、Ⅲ期北方食庫群	『小郡遺跡』
第4次	小郡道路1	1970-12-10~12-27	800m ²	土地造成	Ⅱ期西方官衙群	『小郡遺跡』
第5次	小郡道路1	1987-11-7~1988-1-18	5500m ²	土地造成、範囲確認	Ⅱ期西方官衙群	『小郡遺跡Ⅱ』
第6次	小郡道路1	1988-1-20~1988-2-27	2000m ²	土地造成	Ⅱ期西方官衙群(方町)、Ⅲ期長方形区画(要地)	『小郡遺跡』
第7次	小郡若山B4	1995-11-20~1-27	900m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期SASUOの一部	『小郡街路遺跡』
第8次	小郡道路1	1998-2-2~1998-2-27	900m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期SASUOの一部	『小郡街路遺跡』
第9次	小郡道路1	1997-12-20~1998-2-27	25m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期辺縁束込	『小郡街路遺跡』
第10次	小郡道路1	1998-1-19~1998-3-19	12m ²	重要遺跡確認調査	瓦器・骨	『小郡街路遺跡』
第11次	小郡道路7	1999-2-2~1999-3-12	180m ²	個人追跡	小郡道路7	『埋蔵文化財登録報告書』
第12次	小郡道路1	2000-1-22~2000-2-27	180m ²	個人追跡	Ⅱ期東方官衙群の区画面の一部か	『小郡街路遺跡』
第13次	小郡道路1	1999-9-23~1999-9-28	208.1m ²	駐車場造成	Ⅲ期西方官衙区画	『小郡街路遺跡』
第14次	小郡道路1	1999-9-29	3.3m ²	駐車場造成	追跡測量、追構削平	『小郡街路遺跡』
第15次	小郡道路11	2000-9-22~2000-1-18	180m ²	下水道工事	I 期の土塁、Ⅱ期西方官衙群周辺	『小郡遺跡11-12-13』
第16次	小郡道路11	2002-11-18~2003-2-11	100m ²	下水道工事	Ⅲ期の土塁	『小郡遺跡11-12-13』
第17次	小郡道路13	2003-1-22~2003-2-11	100m ²	下水道工事	Ⅲ期の土塁	『小郡遺跡11-12-13』
第18次	小郡道路14	2007-9-18~11-1	298m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期西方官衙区画、Ⅱ期區画面	『小郡遺跡14-15-16-17』
第19次	小郡道路14	2009-2-23~3-13	123m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期西方官衙区画	『小郡遺跡14-15-16-17』
第20次	小郡道路14	2009-6-1~6-26	204m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期西方官衙区画	『小郡遺跡14-15-16-17』
第21次	小郡道路17	2010-6-1~6-4	182m ²	重要遺跡確認調査	Ⅲ期西方官衙区画	『小郡遺跡14-15-16-17』

第2図 小郡官衙遺跡の既往調査 (s = 1/1500)



2. 古代における御原郡の動向

(1) 御原郡の成立と展開

小郡市は、北側5分の4は筑後國御原郡に、南側5分の1は筑後國井郡に属す。この筑後國の境、及び各郡の境は、国郡制が制定された大宝律令（701年）で施行した可能性が高い。そのため、小郡官衙遺跡（第II期）の成立は早くても7世紀末と考えられ、筑後國御原郡術と考えられる。一方、上岩田遺跡I期は、筑紫國地震（678年）以前の成立と考えられ、評制下の官衙である。井上薬師堂遺跡出土木簡の「夜津評」をもって夜須評に属していたという意見もある。

小郡官衙遺跡の第II期から第III期への画期（8世紀中頃）と対応して、大刀洗町下高橋官衙遺跡の上野・馬屋元遺跡の成立があり、都機能の中軸は移転したと考えられている。

『倭名類聚抄』には御原郡の4郷（長柄、日方、坂井（板井の誤記か）、川口）が記されている。日方は小郡市干瀬、坂井は小郡市大板井に遺跡地を残すが、残る2つは不明である。

(2) 条里制遺構

市内に点在する遺跡地から、旧御原郡の条里が復元されている。小郡官衙遺跡と条里の関係は、「郡家城は（中略）方六町城を、政庁である郡衙は小字向榮地内の（中略）方二町城に想定」（日野尚志）とされていたが、近年、第III期長方形区画が明らかになり、修正が必要になった。第I・II期は方向が異なり条里との整合はないが、第III期長方形区画は、条里地割の中で南辺内側溝（SD851）が、条里の3条7甲（里）の1・2坪と11・12坪の境にあたる。

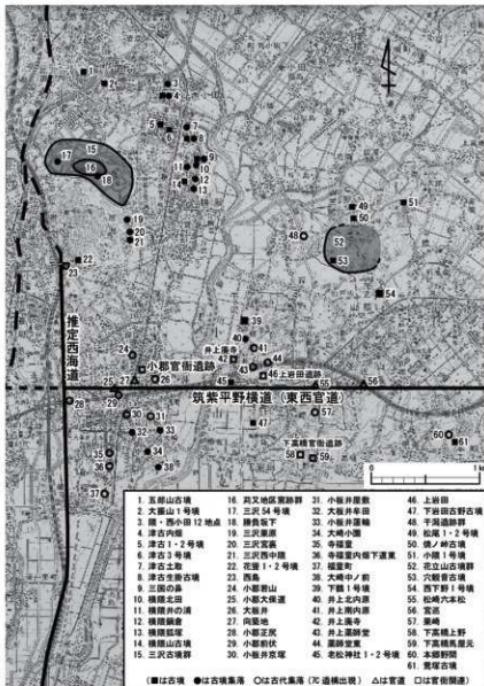
(3) 官道・伝路

大刀洗町宮巡遺跡では小郡官衙遺跡南側を東西に走る官道の存在、小郡前伏遺跡では南西から小郡官衙中心部へ向かう伝路が想定された。東西の官道は、松崎六本松遺跡や小郡大保道遺跡とも確認される。8世紀前半までは、完成し、筑紫平野を東西4.7km以上貫く。小郡官衙遺跡第III期長方形区画南辺の3町南を通る幅6mの直線道路で、御原郡の条里では、6甲の南端から北へ4町にあたる。

(5) 古代の信仰

上岩田遺跡の基壇は、瓦葺磯石建物で仏堂と考えられる。その堂宇は、678年の筑紫國地震で倒壊した。7世紀末には上岩田の北0.5kmに井上廃寺が建立される。伽藍配置は不明だが、南門の掘込地蔵が確認、中軸線が推定され、周囲の地形から東西120m、南北180mの寺域が考えられた。

神社では、「肥前國風土記」に記される媛社神社（小郡市大崎）や「延喜式」神名帳に記された筑後國式内社四社の一つ、御勢大雲石神社（小郡市大保）がある。



第3図 小郡官衙遺跡周辺遺跡分布 (s = 1/40000)



第3章 調査の成果

1. 調査の概要

本調査区は「館」建物群（Ⅱ期西方官衙群・Ⅲ期西方官衙群）の北方に位置し、これまでに推定されていた小郡官衙遺跡第Ⅰ期の方二町区画の北西辺の区画施設が検出されることが予測されていた。また、便益施設は、官衙関連遺構に影響のない部分に遺跡を保護して建設するため、その確認も重要な調査目的である。

調査は開始時点から多くの攪乱に悩まされながら、検出を進めた。既往の調査より想定される第Ⅱ期の区画施設が検出されず、また、新たな建物が検出されたことから調査区の拡張を行い、最終的に238m²の確認調査面積となつた。結果、第Ⅱ期の区画施設は検出されず、新たに第Ⅱ期建物2棟、第Ⅲ期建物1棟をはじめ、弥生時代の大形円形住居、土坑、溝等を検出した。

2. 調査の成果

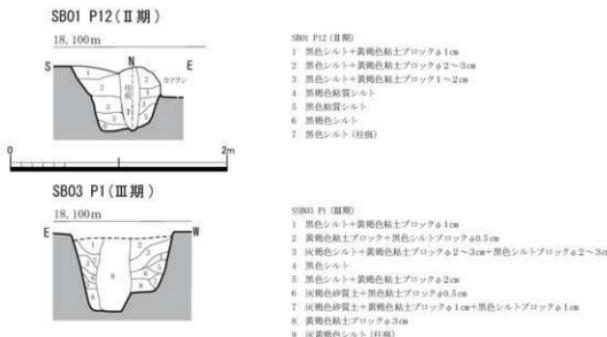
1. 古代の遺構と遺物

1号掘立柱建物[第Ⅱ期建物] (第3・4・5図 図版4)

調査区中央やや東より検出された東西棟の掘立柱建物である。3号掘立柱建物に先行する。主軸をN-38°-Wにとる。4間×2間の側柱建物で、規模は桁行9.0m×梁行4.8m、桁間2.2m、梁間2.4mを測る。柱掘り方は隅丸方形を呈し、一辺0.7m～1.0m程度である。埋土は黒色土を主体とし、黄褐色粘土ブロックを少量含む。柱痕は径およそ20cm、黒色シルトである。P2では、抜き取り痕跡が確認され、径45cm、埋土には黄褐色粘土ブロックを含んでいる。P12では、一部を掘り下げて土層を確認した。10cm程度の層が連続している。掘方下層は黒褐色から黒色粘質シルト主体で上層では黒色シルトに黄褐色粘質土ブロックを含む層が数層にわたる。出土遺物はみられない。

2号掘立柱建物[第Ⅱ期建物] (第3・5図 図版4)

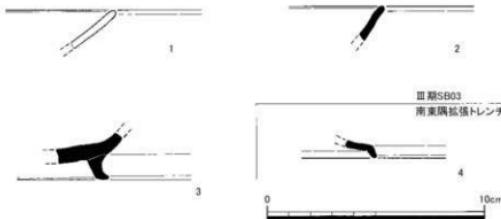
1号掘立柱建物の南東に並んで検出された東西棟の掘立柱建物である。P3とP14がそれぞれ大形の柱穴に切られている。この大形の柱穴は第Ⅲ期の可能性があるが、調査区範囲ではその構成は不明である。主軸をN-37°-Wにとる。5間×2間の側柱建物で、規模は桁行8.8m×梁行4.4m（推定）、桁間1.5～1.8m程、梁間2.2m（推定）を測る。柱掘り方は、隅丸方形を意識したものと見受けられるが、それぞれの辺は建物主軸と必ずしも一致しない。一辺は0.6m～0.9m程度である。埋土は褐灰色土に黒色シルトブロックと黄褐色粘土ブロックを含む。柱痕は径およそ20cm、褐灰色シルトである。出土遺物はみられない。



第4図 SB01 (第Ⅱ期)・SB03 (第Ⅲ期) 柱穴土層断面 (s = 1/40)







第6図 小郡官衙遺跡 SB03（第Ⅲ期）出土土器（s = 1 / 2）

3号掘立柱建物【第Ⅲ期建物】(第3・4・5図 図版5)

調査区中央や東よりで検出された南北棟の掘立柱建物である。1号掘立柱建物から後出す。主軸をN-2°-Eにとる。4間以上×3間の側柱建物で、規模は桁行10.0m以上×梁行6.4m、桁間2.5(～3.2)m、梁間2.0～2.4mである。柱掘り方は隅丸方形を呈し、一辺10m～1.6m程である。埋土は黄褐色粘土ブロックを多く含む。柱痕は径およそ30cm、褐灰色シルトである。P3・P4・P10・P11では長円形となっており、抜き取り痕跡と考えられる。P4の抜き取り痕部分は淡褐色粘土ブロックである。P1では搅乱を利用して土層を確認した。東側が深く掘り下げられており、その部分に柱痕がある。埋土には黄褐色粘土が多く含まれ、数回に分けて埋めている。第Ⅱ期の柱穴と比べて黄褐色粘土の量や灰褐色の砂質土が入ることが特徴的である。

出土遺物 (第6図 図版6)

1は、P1の掘口埋土から出土した土師器壺口縁部片である。2は、P11の皿掘り時に出土した須恵器壺口縁部片である。いずれも小片のため、傾きがはっきりしない。3は、P4の皿掘り時に出土した須恵器高台付壺の高台部である。ちなみに、古代の遺物の出土は極めて少なく、他に南東隅の抜張部の検出時に出土した須恵器高脚部片(4)が出土している。図化できない分も含めて、わずかであった。

3. 弥生時代の遺構と遺物

主要な遺構のみ報告する。弥生時代遺構は検出のみであるが、検出時や搅乱掘削時に露出した土器片等は回収した。

1号堅穴住居跡 (第5図 図版3)

調査区の西側で検出された大型の円形住居跡である。およそ半分が調査区外に広がる。径8.2m程で、搅乱掘削箇所から推定できる深さが40cm程度である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (第7図 図版6)

壺口縁部(1)、鉢(2・3)、筒型器台口縁部(4)が出土した。3は南西部検出時に露出したもので、1/2の残存である。4は深い搅乱掘削段階で、住居埋土に刺さっていたもので住居の下層出土にあたる。

5号土坑 (第5図)

調査区の中央北側で検出された長軸1.7m、短軸1.4m隅丸方形状の土坑である。中央部は別の遺構に切られしており、2号掘立柱建物にも切られている。深さは不明。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (第7図 図版6)

壺口縁部(6)、樽型壺(7・8)が出土した。7・8は同一個体と考えられる。

1号溝 (第5図)

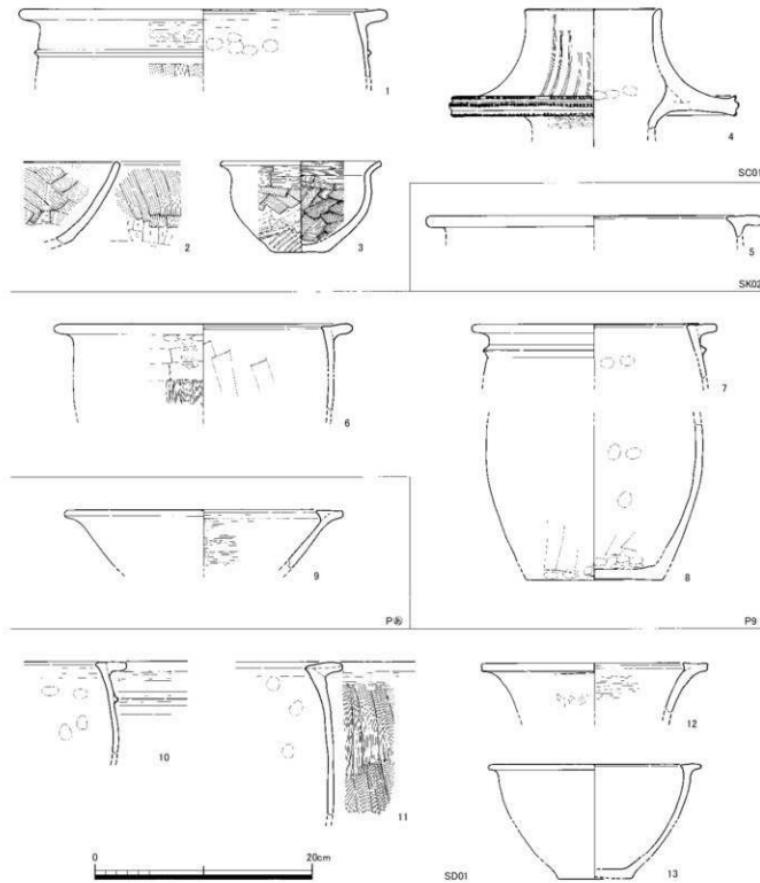
調査区の東側で検出された幅1.1m程の溝である。3号掘立柱建物に切られる。西北西—東南東の方向に



走っている。擾乱掘削箇所から推定できる深さは20cm程度である。埋土は黒褐色土である。

出土遺物 (第7図 図版6)

壺口縁部(10・11)、壺口縁部鉢(12)、鉢(13)が出土した。



第7図 小郡官衙遺跡 弥生時代遺構出土土器実測図



第4章 調査成果のまとめ

今回の調査区は、小郡官衙遺跡第Ⅱ期の方二町区画北西面にあたり（巻頭図版「小郡官衙遺跡変遷図」）、南西から続く柵列あるいは北東から続く溝の延長が想定されたが、いずれも検出出来なかった。それとは別に、第Ⅱ期の主軸をとる建物2棟（SB01・02）と第Ⅲ期の主軸を持つ建物1棟（SB03）が新たに発見された（第5図）。そのため、第Ⅱ期の「方二町区画説」を中心に再検討して、本調査の意義を考察する。

「方二町区画説」の再検討

まず、昭和42～45年度の調査（1地点）では、「郡庁」と想定されるコの字型配置の中心建物群から西へ55.5mに位置する「船」に相当する西方官衙群SB829～834の東側柱通りの延長上に、東妻を合わせた東西棟建物が存在し、それが西方官衙群の北端をなしていると想定された。また、西方官衙群の西端は未確認であるが、SB832の西妻柱通りから9.95m離れた箇所に2.2m間隔の柱掘方（SB835）が確認されており、SB829～831とは違う構造の南北棟建物で取り囲まれていたと考えられた（「小郡官衙遺跡」）。この時点では、SB835は建物だけではなく柵列の可能性が示唆されている。

次に、昭和62・63年度調査により、官衙城を区画する溝（SD849）が検出され、区画北東面が明らかとなる。郡庁と考えられる中央のコの字型配置建物群の中心からは約一町の距離を隔てる。このことを踏まえて第1次調査および周辺地形図と照合すると、北西面ではSB835の柵列が、南東面では地形変換ラインと重複する現代の溝が限界となり、少なくとも方二町の区画を持つことがこの段階で想定された（「小郡官衙遺跡Ⅲ」）。

南東面区画については、平成8年度に小郡遺跡5地点が調査され、地形の落ちが確認された。その後、平成11年度に小郡遺跡8地点が調査され、3号溝状遺構が2町区画の南西面の溝と考えられた。一部の検出で、詳細は不明であるが上端のラインで復元するとN=30°・Wに振っている。SD849とおよそ二町の距離を持っていることから方二町区画説を補強した（「小郡官衙周辺遺跡2」）。

平成21年度の小郡官衙遺跡14B地点南東隅ではSD849が90度で曲がる位置が明らかとなる。溝の北西肩のラインでみると方位はN=50°・Wとなる。断面は逆台形で、深さは80cm程度。黒色土あるいは黒色砂質土ブロックと黄褐色土ブロックが混在して明らかに人為的に埋め戻した状況が覗えた。その延長には、11D地点があり、1号土坑が位置する。これは、土坑としているものの、「官衙Ⅱ期を区画する北西の推定ライン上に位置することと出土した須恵器から遺構の時期が7世紀後半代と考えられ、官衙Ⅱ期の区画に関する遺構の可能性が高い」とも報告されている（「小郡遺跡11・12・13」）。今回の調査から、SD849が本調査区まで延長されないことが明らかであり、遺構形状からも、11D地点で溝が絶続すると判断できる。下水道付設の狭小なトレレンチ調査のため、不明点も多い。のことから、SD849は主に正倉の北西部を閉む溝という位置づけが可能である。SD849は長者ヶ泉付近で一旦途切れるが、その延長は調査範囲では検出されていなかった。長者ヶ泉が谷頭にあたり、その延長は溝が続くのではなく地形を取り込み、それを一部加工したものである可能性もあるだろう。

以上のことから、小郡官衙遺跡第Ⅱ期の区画は、北東面はSD849、南東面は地形境界、南西面は8地点3号溝である可能性が考えられる。ただし、北西面のSD849と南西面の8地点3号溝の軸が異なる点にも注意が必要だろう。北西面は北側ではSD849が折れ曲がるが、これは主に正倉域を区画するものであり、南側については、SB835が柵列ではない可能性が高い。第Ⅱ期の区画北西面は、想定されているよりも区画が広がる可能性もしくは一部張り出し部を持つ可能性も出て来た。

「西方官衙群（館）」の見直し

今回の調査を受けて、第Ⅱ期西方官衙群（館）の北の限界が明らかとなり、また、SB835が柵列ではなく、建物の一部である可能性が高まった。おそらく、11B-1トレレンチで確認された柱穴も同一建物を構成し、SB835が西方官衙群の西端の建物列と考えられる。以上のことから、西方官衙群は、中央に配された東西棟3棟の四方を取り囲むような建物配置が復原できる。これは、北西-南東方向に37.5m、北東-南西方向に58.5mの範囲に及ぶ。さらには、SB03の検出により第Ⅲ期西方官衙群（館）の北方への広がりも明らかとなり、11C-2トレレンチの柱列も第Ⅲ期建物の可能性が高くなった。

これらの第Ⅱ・Ⅲ期の西方官衙群建物は、主軸がやや異なるものもあるので、時期差がある可能性、小



時に分けられる可能性を残している。今後の検討課題としたい。

今回の調査では、これまでに想定された方二町区画の北西面の修正、西方官衙群の広がりが予想されるため、繼續して調査を行う必要が出来た。

表1 小郡官衙遺跡出土土器観察表

出土遺構	博団番号	版図番号	器種	法量cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考
SB03 [3期]	P1 振方	6-1	— 土師器坏	残存高:1.8	にぶい橙	精良、径1mm以下の砂粒を多く含む 外:にぶい	良	器表摩滅のため調整不良 判別しせず	小片のため傾き判別しせず
	P11 直瓶	6-2	— 須恵器杯	残存高:1.6	灰	精良、径1mm以下の砂粒を多く含む 外:にぶい	良	回転ナデ	小片のため傾き判別しせず
	P4 直振	6-3	6-9 須恵器杯	残存高:2.1	灰	やや粗、2mm以下の砂粒をやや多く含む 外:にぶい	良	回転ナデ、底部内面中央付近はその後ナデ	
南東隅延長トレント手	6-4	— 須恵器高杯	残存高:0.85	灰	精良、径1mm以下の砂粒を多く含む 外:にぶい	良	回転ナデ		小片のため傾き判別しせず
弥生SC01	7-1	6-5 弥生土器壺	口:(34.0) 残存高:6.2	にぶい橙	やや粗、5mm以下の砂粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコナデ、体部外 面はハケメ、頭部と異 常にハココロ		
	7-2	— 弥生土器鉢	残存高:7.6	内:にぶい橙 外:橙	やや粗、4mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコナデ、体部 内面はハケメ、体部外 上半はハケメ、下半はヘ ラス(後ハケメ、底部内 面はナデ、外表面はハケ メ)		
	7-3	6-1 弥生土器鉢	口:(14.9) 高:8.35 底:5.55	にぶい黄橙	やや粗、4mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部～体部内面 はハケメ、口縁部端部は ハコナデ、頭部外表面はハ ケメ(後ハケメ)、体部外 上半はハケメ(後ハケ メ)、下半はタキキ(後タキ キ)、底部はナデ		内外面に黒斑
	7-4	6-8 弥生土器 圓筒形台	上端部径: (12.7) 明ホ光 残存高:(10.9) 跨距部:(26.7)	にぶい赤褐～ 明ホ光	密、径1mm以下の砂 粒をわずかに含む 外:にぶい	良	上端部～跨距部にかけて ラミガキ、跨距部外表面はコ ナデ(後ハケメ、他はコロナ デ)		丹波磨研石器 跨距部端部に刻 印
弥生SK2	7-5	— 弥生土器壺	口:(31.0) 残存高:2.0	内:にぶい橙 外:にぶい橙～ にぶい	やや粗、5mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコナデ、体部 内面は板状工具ナデ		口縁部～体部 内面に黒斑 体部外表面にスズ
弥生SK05 〔旧弥生P9〕	7-6	— 弥生土器壺	口:(27.5) 残存高:7.95	内:にぶい橙 外:浅黃橙	やや粗、2mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコロナデ、体部 内面は板状工具ナデ、体 部外表面はハケメ、頭部下 方はその板状工具ナ デ		外表面スズ
	7-7-8	6-3-6 弥生土器 樽形壺	口:(22.6) 残存高:4.85+ 14.25 底:(12.5)	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙 ～淡黄橙	やや粗、2mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部～突起部はコナ デ、体部は板状工具ナデ 後ナデ、底部はナデ		底部外表面に黒 斑
P8	7-9	6-7 弥生土器 高杯	口:(25.7) 残存高:5.75	内:にぶい橙 外:にぶい黄橙	やや粗、5mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部内面はコナデ、器表摩 滅のため不鮮明、他はコ ナデ		
弥生SD01	7-10	— 弥生土器壺	残存高:8.35	にぶい黄橙	やや粗、2mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部内面はコナデ、器表摩 滅のため不鮮明、他はコ ナデ		
	7-11	— 弥生土器壺	残存高:13.9	内:にぶい黄橙 外:淡黃橙	やや粗、2mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコロナデ、頭部 内面はナデ、器表摩 滅のため不鮮明、体 部はハケメ		
	7-12	— 弥生土器 広口壺	口:(20.9) 残存高:4.45	にぶい橙	やや粗、2mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	口縁部はコナデ、頭部 内面はハラガキ、外表面 はハケメ		黒色磨研土器
	7-13	6-2 弥生土器壺	口:(19.6) 底:(6.9)	内:にぶい赤褐 底:10.55	やや粗、3mm以下の砂 粒をやや多く含む 外:にぶい	良	器表摩滅のため調整不 明		



付編 自然科学的分析結果

株式会社 古環境研究所

1.はじめに

本確認調査では、小郡官衙遺跡第Ⅱ期の大型建物と第Ⅲ期の大型建物が判明された。これら建物の性格を検討することを目的として、花粉分析とプラント・オバール分析を実施した。

2.試料

分析試料は、第Ⅱ期 SB01 (p12) の埴方埋土採取試料1と試料2、および第Ⅲ期 SB03 (p1) の埴方埋土採取試料3、同柱頭から採取された試料4の計4点である。

3.花粉分析

(1) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え 15 分間湯温
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で漂浮となる大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除く
- 4) 25%火水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリジン処理(無水酢酸9:濃硫酸1のルードマン氏液を加え1分間処理)を実施
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は定年レベルによって、科、属別、属、亜属および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。同定分類には現生標本、鳥倉(1973)、中村(1980)を参考して行った。(以下について)は、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と对比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

(2) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草木花粉を含むもの5、草木花粉17、シダ植物孢子2形態の計42である。これらの学者名と和名および学名を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料については、周辺の植生を復元するために花粉組成を基準とする花粉ダイアグラムを図1に示し、主要な分類群は顕微鏡写真を示した。また、寄生虫卵についても観察したが判出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。
(樹木花粉) マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複数種米厘ア属、スギ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ属、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属クリ、シイ属、ブナ科、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属、エキノキ属-ムクノキ、サンショウ属、ブドウ属、スイカズラ属
(樹木花粉と草木花粉を含むもの) クワ科-イクラサ科、バラ科、マメ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属
(草木花粉) イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ギンジン属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナシ科、アブナラ科、ツリフネ科、シダメグチ科、セリ属、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ属、キク属、オナモ属、ヨモギ属
(シダ植物孢子) 単柔孢子、三条孢子

2) 花粉群集の特徴

それについて、花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

・第Ⅱ期 SB01 (p 12) 壁方埋土 試料1、2

掘方埋土の2試料は、花粉の構成および組成は極めて類似した傾向を示す。すなわち樹木花粉に比べ草木花粉の占める割合が非常に高く、77%~80%を占める。草木花粉では、ヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ科が多く、キク科、タングボボケ科、セリ属が伴われる。樹木花粉では、クリ、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属が低率に出現する。

・第Ⅲ期 SB03 (p 1) 壁方埋土、柱頭 試料3、4

掘方埋土、柱頭においては、花粉の構成および組成は極めて類似した傾向を示す。樹木花粉より草木花粉の占める割合が高く、65%~68%を占める。草木花粉では、ヨモギ属が優占し、イネ科の出現率も高い。他にキク科、セリ属、ツリフネソウ属が低率に出現し、柱頭からはソバ属が出現する。

(3) 花粉分析から推定される植生と環境

1) 第Ⅱ期 SB01 (p 12) 壁方埋土

周辺は樹木がほとんど生育しておらず、調査地周辺はヨモギ属の草本が広く分布する乾燥した人為地が広がっていた。他に草本ではイネ科、キク科、タングボボケ科、セリ属が分布する。樹木は少ないが、クリ、コナラ属コナラ属、コナラ属アカガシ属が遙方に分布していた。もしも周辺などとは独立木として生育していた。以上のことから、第Ⅱ期の建物の周辺はヨモギ属を主とする草本が分布し、植栽等は行われず、建物部の機能は主ねばよい生態が推定される。

2) 第Ⅲ期 SB03 (p 1) 壁方埋土、柱頭

周辺には樹木があり生長せず、調査地周辺はヨモギ属を主にイネ科、キク科、セリ属などの草本が分布する乾燥した環境であった。一方、ツリフネソウ属は当たりのよい水辺などの湿地に生育する草本である。虫媒花植物であるから近隣して生育していたことが考えられ、近傍に水辺の分布が可唆される。また樹木では少しが多くなるが、第Ⅱ期 SB01 (p 9) 壁方埋土ではみられないことから、植栽によって増加したと考えられる。以上のことから、第Ⅲ期の建物は周辺にスキガ種栽培され、ツリフネソウ属が生育する湿地か池の分水が考えられ、植栽や池の耕作が判明する建物であったと推定される。

4. プラント・オバール分析

(1) 方法

プラント・オバールの抽出と定量は、ガラスビーズ法(藤原、1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥(乾蛇) 2) 試料約1gに対し直徑約40 μmのガラスビーズを約0.02g添加(0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法(550°C・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散
- 5) 沈殿法による20 μm以下の微粒を除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡、計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機能細胞由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはおもにアレバート1枚分の精度に相当する。試料1あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比

率を乗じて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の比率重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細菌珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケアキ科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

（2）結果

1) 分類群

検出されたプラント・オバールの分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表2および図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、イネ科栽培植物（イネ、ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来する植物珪酸体は検出されなかった。

〔イネ科〕ヨシ属、ススキ属（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科-タケアキ科〕ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキササ節型（ササ属チマキササ節・チスマササ節など）、ミヤコササ節型（ササ属ミヤコササ節など）、未分類等
〔イネ科-その他〕表皮毛起源、柱状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕その他

2) プラント・オバールの検出状況

・第Ⅱ期 SB01 (p12)

堀方理土（試料1・2）では、ネザサ節型が多く検出され、ススキ属、ウシクサ族Aも比較的多く検出された。また、試料1ではチマキササ節型、試料2ではヨシ属も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が優勢であり、ススキ属も比較的多くなっている。

・第Ⅲ期 SB03 (p1)

堀方理土（試料3）では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ススキ属、ウシクサ族Aなども認められたが、第Ⅱ期 SB01 (p12) の試料と比較していずれも密度が低くなっている。柱状（試料4）でも、おもむね同様の結果である。おもな分類群の推定生産量によると、やや少量ながらネザサ節型が優勢となっている。

（3）プラント・オバール分析から推定される

植生と環境

第Ⅱ期 SB01 (p12) の堀方理土の堆積当時は、メダケ属（ネザサ節）などの竹籠類をはじめ、ススキ属やチガヤ属なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。試料2で検出されたヨシ属については、何らかの形で利用されていた植物に由来する可能性も考えられる。第Ⅲ期 SB03 (p1) の堀方理土や柱状についても、おもむね同様の状況であったと考えられるが、人為的な影響など何らかの原因で各植物とも減少したと推定される。

分析試料が採取された建物跡については、穀場（えいとう：穀首で刈り取って穂頭が付いた状態）などを貯蔵する倉庫の可能性も想定されていたが、穀場や朝霞に由来するプラント・オバールはいずれの試料からも検出されなかった。また、イネ以外のイネ科栽培植物（ムギ類、ヒエ、アワ、キビなど）に由来するプラント・オバールも検出されなかった。

5.まとめ

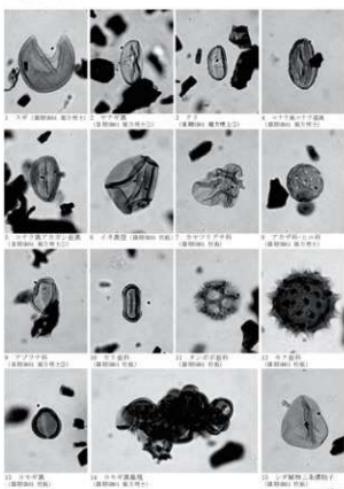
第Ⅱ期 SB01 (p 12) 堀方理土と第Ⅲ期 SB03 (p 1) 堀方理土、柱状で花粉分析とプラント・オバール分析を行った。その結果、周辺には樹木があり生育せず、ヨモギ属を中心にイネ科、キク科、ランボボア科、セリ科などの草本が分布する日当たりの良い乾燥した環境が示唆された。第Ⅲ期 SB03 (p 1) 堀方理土、柱状からは、特徴的にスギが検出され、周辺でのスギの植栽が示唆され、近接してフリフネッソ属が生育し、湿地か池の分布が考えられた。このことから、第Ⅱ期の建物は植栽や他の構築が併存する建物であったと推定される。なお、建物跡ごとに建物の機能を有すればよいので、第Ⅲ期の建物は植栽や他の構築が併存する建物であったと推定される。なお、建物跡ごとに、穀場などを貯蔵する倉庫の可能性も想定されたが、分析からはそれを示唆する結果は得られなかった。

参考文献

- 金子清一・谷口博一（1987）雑形動物・扁形動物・医動物学・新原臨床検査測定書。8. 医歴収集出版。p. 9-55.
金原正明（1993）花粉分析による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代研究の方法。角川書店。p.248-262.
金原正明（1999）落生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2. 同成社。p.151-158.
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および落生虫、藤原京跡の便所遺構・藤原京下条1号坊-奈良國立文化財研究所。p.14-15.
金原正明・金原正子（2013）植生と農耕における土壤層分析の実証的研究。日本考古学会会第30回大会研究発表会要旨集。p.112-113.
鳥島巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収載目録第5集。60p.
中村純（1967）花粉分析。古今書院。p.82-102.
中村純（1974）イネ科花粉について。とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。黎明研究.13.p.187-193.
中村純（1977）植物とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の増補。大阪自然史博物館収載目録第13集。91p.
Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science. 19, p.231-245.
杉山真二・藤原忠志（1986）機動細菌珪酸体の形態によるタケアキ植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学。19, p.69-84.
桜山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）。考古学と植物学。同成社。p.189-213.
桜山真二（2009）植物珪酸体と古生態。人と植物の関わりあい④。大地と森の中で-縄文時代の古生態系-。博文の考古学Ⅲ。小林靖子編。同成社。p.105-114.
藤原忠志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(I)-数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学。9. p.15

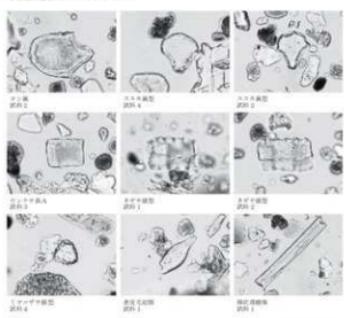
分類群	学名	II期SB01(p1)		III期SB03(p1)	
		成層土	腐泥土	成層土	腐泥土
All pollen	花粉(全形)				
Polygonaceae	タリソス	1		3	
Aster	アザミ属				
Dago	シガラム	1		1	2
Plantago	リンドウ属			10	28
Cyperaceae	スズラン	1		1	1
Taxaceae-Cyathophylloideae-Cupressaceae	イチイ科(イチイモドキ等)ノキ科			3	5
Beta	ヒルムシロ	4	2	3	1
Other	ハツカニク属			1	1
Aralia	カラマツ属			1	1
Compositae	タリソス	17	9	4	2
Gentianaceae	シバトキ	1	4	3	1
Oenanthe	ブナ科				
Oenanthe subgen. Cyathophylloides	コトウダラ属(オナシイモ属)	1	1	3	1
Oenanthe subgen. Oenanthe	コトウダラ属(オナシイモ属)	3	8	4	1
Urticaceae	ウツボグサ科				
Urticaceae-Apiales	アザミ属			1	1
Zygophyllaceae	シバトキ属				
Fern	シダ属			1	1
Lycopodiophytina	クモモ属			1	1
Monocot - Nonherbal pollen	クモモ属			1	1
Monocot - Urticoides	クモモ属(イカヤ科)	1		3	
Monocot - Lilioides	クモモ属			1	1
Lemnophytina	クモモ属			1	1
Sphagnum	クモモ属(アヤメ科)	1			
Sphagnum-Polytrichum	クモモ属(アヤメ科)			1	1
Nonherbal pollen	花粉(全形)				
Herbal pollen	花粉(全形)	37	60	27	51
Orchid type	花粉(全形)			1	1
Cyperaceae	シカクイモ科			1	2
Aster	ギンガム属			1	1
Gentianaceae	シバトキ属			1	1
Chrysanthemum-Anthonothecia	アザミ属(ニコ科)	2		1	1
Caryophyllaceae	アザミ科	2		1	1
Malvaceae	アザミ科			1	1
Brassicaceae	シバトキ属			2	4
Hedysaraceae	アザミ科	1		1	1
Apiales	アザミ科	4	3	3	3
Pinaceae	オオイロイヌノフク			1	1
Vaccinaceae	アザミ科			1	1
Lamiaceae	タガネの木科	3	8	1	1
Antennaria	アザミ科	8	9	8	9
Asplenium	アザミ科			1	1
Anemone	シバトキ属	108	171	68	100
Ranunculaceae	シバトキ属				
Musaceae type	アザミ科	6	7	12	8
Urtica type	アザミ科	21	21	21	21
Other herbal pollen	アザミ科				
All herbal pollen	アザミ科	208	208	113	109
Total pollen	正則形数	304	265	145	281
Pollen Indexes of 100%	正規分布中の花粉密度	1.1	1.1	1.1	1.1
	$N \times 10^3 \times 10^{-2}$				
Unknown pollen	未定花粉	14	8	11	14
Pinaceae	シバトキ属	1	1	1	1
Pinaceae type	アザミ科	1	1	1	1
Malvaceae	アザミ科	1	1	1	1
Malvaceae type	アザミ科	1	1	1	1
Dipsacaceae	アザミ科	1	1	1	1
Chemical woods fragments	樹脂化物質・樹脂塊	(+)	(-)	(-)	(-)

小郡官道跡における花粉

表2 小郡官道跡におけるプラント・オバール分析結果
標高密度(単位: m⁻²)

分類群	学名	地點・試料		II期SB01(p1)		III期SB03(p1)	
		成層土	腐泥土	成層土	腐泥土	柱根	
イネ科	Gramineae						
ヨシ属	Phragmites			7			
ススキ属	ススキ type	76	46	7	29		
ワクサ属	Andropogon type	44	92	57	29		
タケ科	Bambusoideae						
ネササ属	Pleioderissect. Nezasa	196	229	100	122		
ミヤコササ属	Sasa sect. Sasa etc.	6					
ミヤコササ属	Sasa sect. Crassinodi			7			
未分類群	Others	63	131	64	72		
その他のイネ科	Others						
真皮毛花粉	Husk hair origin	13	13	7	7		
棒状球形体	Rodshaped	139	177	92	50		
未分類群	Others	271	229	235	158		
樹木起源	Arboreal			7			
その他	Others						
(海綿骨針)	Sponge spicules	6					
植物性胞子	Total	808	923	569	475		
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m ⁻² cm): 試料の仮定比を10と仮定して算出							
シカクイモ科	Phragmites			0.41			
ミヤコササ属	Mischaetia type	0.94	0.57	0.09	0.36		
シカクイモ科	Pleioderissect. Nezasa	0.94	1.10	0.48	0.59		
ミヤコササ属	Sasa sect. Sasa etc.	0.06					
ミヤコササ属	Sasa sect. Crassinodi			0.02			
メダカ率	Medaka ratio	95	100	100	96		
タケ植物の比率 (%)							
ミヤコササ属	Pleioderissect. Nezasa	95	100	100	96		
ミヤコササ属	Sasa sect. Sasa etc.	8					
ミヤコササ属	Sasa sect. Crassinodi			4			
メダカ率	Medaka ratio	95	100	100	96		

小郡官道跡のプラント・オバール



図版2

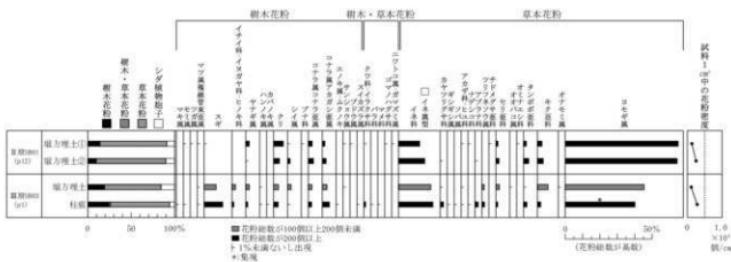


図1 小郡官衙遺跡における花粉分析結果



図2 小郡官衙遺跡におけるプラント・オバール分析結果

図版 3



小郡官衙跡全景（北西から）



弥生 SC01 検出状況（南から）



図版4



機械掘削状況



検出状況（第Ⅱ期区画想定部分）



SB01P3 (北西から)



SB01P12 土層断面 (南東から)



SB01 柵行検出状況 (北西から)

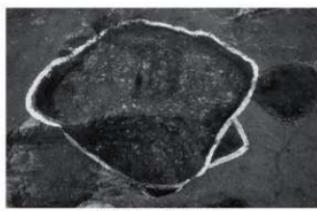


SB02 柵行検出状況 (北西から)

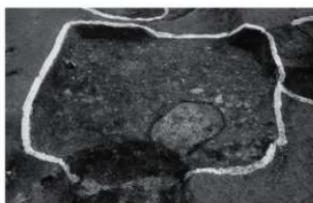
第Ⅱ期建物



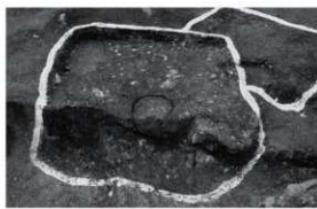
図版 5



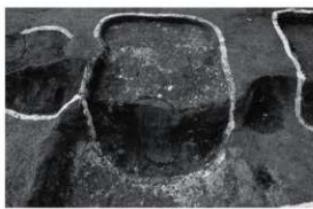
SB03P5 (南西から)



SB03P3 (北から)



SB03P2 (北から)



SB03P1 (北から)



SB03 采行検出状況 (北西から)



SB03 衍行検出状況 (北から)

第Ⅲ期建物



図版 6



遺構保護状況（北東から）



史跡公園から調査地を望む（南東から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9

小郡官衙遺跡出土遺物



報告書抄録

ふりがな	くにしていせき おごおりかんがいせきぐん おごおりかんがいせき						
書名	国指定史跡 小郡官衙遺跡群 小郡官衙遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	小都市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第300集						
編著者名	山崎 賴人						
編集機関	小都市教育委員会 小都市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 Tel0942-75-7555						
発行年月日	平成28年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	しょざいり 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度 調査期間 調査面積 調査原因				
おごおりかん 小郡官衙遺跡	ふくおか県 おこひなし 小郡市 おごおり 小郡	40216	33° 26' 10"	130° 33' 60"	2015.6.9 2015.8.15	238 m ²	遺跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小郡官衙遺跡	官衙	弥生 奈良	住居・溝・土坑 掘立柱建物	弥生土器 土師器・須恵器	建物3棟 の追加		

本遺跡は『筑後國御原郡衙』に比定され、昭和46年に国指定史跡となっている。大きく第Ⅰ期（7世紀中頃～後半）、第Ⅱ期（7世紀末～8世紀前半）、第Ⅲ期（8世紀中頃～後半）にわかれ、第Ⅳ期に御原郡衙が置かれたと考えられる。

弥生時代の集落遺構のほか、小郡官衙遺跡に連関する第Ⅱ期建物2棟、第Ⅲ期建物1棟を検出した。既往の調査より想定される第Ⅱ期の区画である柵列は検出されなかった。

第Ⅱ期の建物群が新たに発見されたことにより、第Ⅱ期西方官衙群（館）の北端部分が明らかとなった。区画施設については一部途切れるのか、外側に広がるのかが今後の課題として残る。また、第Ⅲ期の西方官衙群（館）についても新たに南北棟1棟が追加され、西方官衙群の建物構成がより北側へ広がることが明らかとなった。

小郡官衙遺跡

小都市文化財調査報告書第300集

平成28年3月31日

編集 小都市教育委員会
 福岡県小郡市小郡 255-1
 発行 片山印刷有限会社
 福岡県小郡市祇園1丁目 8-15

